

玉音放送前後

七月二十八日、鈴木内閣は、ポツダム宣言を黙殺するという態度を表明したことは、戦争終結への道を自ら閉ざす結果となった。

二月のヤルタ会談の時点では、アメリカの原子爆弾は完成されておらず、対日戦はソ連の対日参戦を必要としていたアメリカであった。

しかし、七月十六日、原爆の実験に成功した現在、アメリカにとってソ連の参戦は不必要であり、またドイツ降伏後の米ソ関係から見ても、ソ連の対日参戦はアメリカにとって不利をもたらすおそれがあった。

しかし、ドイツ降伏三ヶ月後にソ連が日本に宣戦するという約束がある。

ヤルタで決められたこの約束を、ソ連は履行するであろう。

その時期は八月八日、日本政府が、ポツダム宣言を「黙殺」するといふ以上、八月九日より前に日本に原子爆弾を投下し、ソ連参戦前に日本に無条件降伏を実現させるという、アメリカの戦略は決まった。

ヒロシマ、長崎の原爆投下は決まった。

米ソの、このような約束、かけ引きを知らない日本政府は、九日になつて、ようやく事態の急迫を悟つた。

御前会議は、十日の午前二時半、国体維持を条件としてポツダム宣言受諾を決定した。

しかし、軍部の抗戦態勢は修まらず、また、「国体護持」という条件が連合国によって受け入れられるか否かという不安が支配層の中にあつ

た。果たして十二日に受信した、連合国の公式回答には、その点が触れられておらず。

ただ「天皇は連合国最高司令官の従属下におかれる」とあつた。

しかし、従属と訳すべきか否か、外務省は「制限」と訳したが、軍部は納得せず、十三日の一日が空費された。

十四日早朝、b29一機が東京上空でビラを撒いた。

それには、降伏についての交渉の公文が書かれていた。

これを知つた木戸幸一内大臣は、陸海軍の動揺、民衆の蜂起を予想し、宮中に入つて鈴木首相とともに御前会議の開会を決めて、最高戦争指導会議の構成員と全閣僚、枢密院議長が参加、天皇は戦争終結の決意をのべた。

その夜、天皇の終戦詔書録音が宮中で行われた。

反対の陸軍将校は、森近衛第一師団長を殺害し、にせの師団命令書を作つて、宮城を占領したりしたが、夜明け前に、宮城を占領している部隊が鎮圧され、正午、ラジオで予告されたとおり、『玉音放送』が行われた。

この詔書を「敗戦」と悟つたひと、「抗戦」と誤解した人など、さまざまに受け取り方をして、混乱したが、やがて戦争が終わったという実感が、国民の間に広がつてゆくのであつた。